

『重編諸天伝』 訳注記 (三)

林 鳴 宇

◎凡 例◎

- 一、本稿は、『駒澤大学仏教学部研究紀要』第六六号掲載した『重編諸天伝』訳注記(二)のつづきである。
- 一、内容の構成は、原文・原文の現代語訳・注・記の順とした。
- 一、底本は、私蔵『重編諸天伝』二卷(中野是誰、寛文元年刊)を用いた。大日本統蔵経二乙ノ二三ノ二(台湾新文豊版では第一五〇冊)にも『重編諸天伝』を収録したが、誤字脱字があるほか、どここの蔵本に拠るかについても明示されていないため、ここでは参照しない。
- 一、底本では、一部の旧字や異体字を用いるが、本訳注は常用漢字や正字に統一した。
- 一、原文読解の便宜のため、底本の読点を参考し、あらたに原文に標点を施した。
- 一、現代語訳は、基本的に底本の句読点をもとに訳出したものである。しかし、稀に見られる難解な箇所や不明の語句については、訳文前後の呼吸にそうように、その

訳を増広また省略することがあり、増広する場合はへで増補した部分を示し、省略する場合には注にてその旨を記した。

- 一、各段の諸天の贊としての詩偈は、それぞれの伝記を略述したもので、伝記の現代語訳と重複することを避け、便宜上、書き下し文のみを以て訳した。

一、各段の語句の注は、原則として、難解であると思われる人名・地名・仏教教理用語、そして引用された經典の所出に限っておきたい。

- 一、各段の記は、主に『重編諸天伝』を開講した平成一八(一九九)年の「仏教特講Ⅲ」の講義の中で示した問題意識や感想などによる。さらに智顛『金光明經文句』、知礼『金光明經文句記』、從義『金光明經文句新記』、宗暁『金光明經照解』の四書を参考し、天台教学に関わるもので、各段において注意すべき箇所を記し、天台教学における『重編諸天伝』の位置づけを示した。

◎ 訳注記 ◎

大梵天王伝

言梵王者、語略故也。西域云「梵覽摩」、此翻「離欲」。或云「清浄」、或云「極浄」。『楞嚴經』云、「身心妙円、威儀不闕。清浄禁戒、加以明悟。是人応時、能統梵衆、為大梵王。」自他化天之上、即有四禪。凡十八天、於初禪中、有乎三天、所謂梵衆、梵輔及大梵也。雖上有三禪一十五天、内無雜想、外無語言、唯味禪悅、皆梵天統。故『楞嚴』云、「其次梵天、統攝梵人、円滿梵行。」『法華文句』云、「梵王号令、総上冠下。」荆溪云、「梵即色界主、亦三界主。」余皆臣属。良由此天、内有覺観。外有語言故也。『華嚴』称「梵王」、主小千界、由居小千之中。『法華』称「娑婆界主」、主大千界、乃居大千之中、故統余界。是知横則統小大千、豎則総上冠下、総称王号。

大梵天王の伝記

梵王という呼び名は、略称である。西域への諸国^{ブラフマ}では「梵覽摩」と呼ばれ、中国では「離欲」と訳され、「清浄」あるいは「極浄」と訳されたこともある。『楞嚴經』に、「身も心も穢れることなく、仏法を行うための威儀も正しい。禁戒を守りながら、その意義をもよく理解した。時代に最も相応しく、梵天界の民衆を上手く統率できる大梵王である」とい

う。〈欲界の第六天である〉他化自在天の上には四禪天がある。〈この四禪天は〉十八の天界に分けられ、初禪天には梵衆、梵輔及び大梵の三つの天界がある。大梵天界の上の二禪、三禪、四禪の三天も十五の天界によって構成され、ここにいる者は雑念も言語もなく、禪定をひたすらに楽しむだけであり、これらの諸天界はすべて大梵天王の管轄となる。このようなことから『首楞嚴經』に、「大梵天は、色界のすべての民衆を統率し、その役割を完璧にこなした」という。『法華文句』に、「梵王の号令は、色界の十八天に伝わる」という。〈天台宗の〉荆溪湛然法師は、「梵天王は色界の主宰のみならず、また三界の主宰でもある」と言い、〈欲界、色界、無色界の〉三界にいる者はみな大梵天の臣民であるとした。その理由は、大梵天王が〈仏道の参究に対し〉、自身に悟入させる観法を用い、他人に言葉で宣教することが上手にできるからである。『華嚴經』は彼を「梵王」と称し、一つの小千世界を主宰すると言う。なぜなら、〈大梵天王は〉この小千世界の中に居るからである。『法華經』は彼を「娑婆世界の主宰」と称し、三千大千世界を主宰できたことから、すべての世界を統率できることになる。これらの例にしたがえば、大梵天王は一つの小千世界ないし三千大千世界を管轄できるだけでなく、その号令は〈欲界、色界、無色界の〉三界にまで及ぶのである。これは彼を王と呼ばれた理由である。

○西域云：「梵覽摩は梵語 Brahma (ブラフマー) の音写である。他の訳語は、『法華文句』卷第二下、「梵者此翻離欲。除下地繫上升色界、故名離欲、亦称高淨」また、宋・遇栄「仁王護国般若經疏法衡抄」卷第三、「梵衆天等者、其云梵覽摩。此云清淨、亦名極淨、離欲界染法、於色界得極淨」などを参照。

○『楞嚴經』云：「『首楞嚴經』卷第九に、「如是一類名梵輔天、身心妙円、威儀不缺、清淨禁戒、加以明悟。是人応時、能統梵衆、為大梵王」とある。

○他化天「欲界の第六天、他化自在天のこと。李師政『法門名義集』「世界品法門名義第七」に、「欲界六天。第一四天王天、第二忉利天、第三夜摩天、第四兜率陀天、第五化樂天、第六他化自在天」とある。

○十八天「色界の十八天のこと。李師政『法門名義集』「世界品法門名義第七」に、「色界四禪合十八天。初禪梵天、梵衆天、大梵天。第二禪少光天、無量光天、光音天。第三禪少淨天、無量淨天、遍淨天。第四禪福生天、福受天、広果天、無極天、此四天是凡夫。無煩惱天、無熱天、善見天、善現天、色究竟天、從無煩惱天以後五天是阿那含人。依第四禪修五品動禪生五天中、名五淨居天」とある。

○『楞嚴』云：「『首楞嚴經』卷第九参照。

○『法華文句』云：「『法華文句』卷十下参照。

○荆溪云：「荆溪湛然（七一〜八二）の『法華文句記』卷

三中に、「梵即色主、亦三界主、魔為欲主」とある。

○内有覺觀：「『法華文句』卷二下に、「任禪中間、内有覺觀、外有言説、得主領為王。單修禪為梵民、加四無量心為王也」とある。

○『華嚴』称「梵王」：「『六十華嚴』卷二六「十地品第二十二之四」に、「千世界主大梵天王、能於一時、流布慈心、滿千世界。亦能放光、遍照其中（中略）菩薩住是地、多作大梵天王、主千世界、諸根猛利」とある。

○『法華』称「娑婆界主」：「『法華經』「序品」に、「娑婆世界主、梵天王」とある。また、「娑婆世界」は一般的に三千大千世界のことを指す。『法華經』「從地踊出品」に、「娑婆世界三千大千国土、地皆震裂。而於其中有無量千萬億菩薩摩訶薩同時踊出」とあり、『大唐西域記』に「索訶世界（舊曰娑婆世界、又曰娑訶世界、皆訛也）、三千大千国土、為一仏之化撰也」とある。

※ ※ ※

其別名者、梵語「尸棄」、此云「頂髻」、亦翻「螺髻」、由肉髻似螺。『法華文句』云、「外国称火為樹提尸棄。由此王本修火光定、破欲界惑」。『俱舍論』云、「大梵天王無別処所。但於梵輔天中高樓閣者、名大梵天。」

身量長一踰繕那半、身白銀色、宮殿衣服皆黄金色、壽命一劫半。『阿含經』云、「諸梵来下、並同人形」。『經律異相』云、

「梵王顔如童子。」『法苑』云、「色界諸天不著衣服、如著不異。頭雖無髻、似如天冠。無男女形、相唯一種。」「華嚴經」中、以十地對十王、則梵王乃八地菩薩。『智論』校量梵福云、「滿閻浮地人福、不如西瞿耶尼一人福。滿西瞿耶尼人福、不如東弗喻逮一人福。滿東弗喻逮人福、不如北鬱單越一人福。乃至第六天衆福、不如梵天一人福。加修四量心。報為天王。」

大梵天王の別名は、梵語では「尸棄^{シキン}」と言い、中国では「頂髻」と訳された。〈梵王の頭頂にある〉肉髻は、渦巻きのかたちになることから、「螺髻」と訳されたこともある。『法華文句』に、「外国では火のことを樹提尸棄^{シキン}と言う。大梵天王はもともと火焰光を放ち、禪定を修行し、欲界の煩惱を打ち破ったのである」という。『俱舍論』に、「大梵天王の居場所は、梵輔天界にある「大梵天」と名づけられた高い宮殿である」という。

大梵天王の身長は一由旬半あり、その身は白銀の色をし、その宮殿や衣服は全て黄金の色である。その寿命は一劫半になる。『阿含経』に、「諸の梵天が下生するとき、すべて人の形となる」という。『経律異相』に、「梵王の顔は幼い男子に似てる」という。『法苑珠林』に、「色界の諸天は、〈俗世間の〉衣服をしないが、〈天衣を着る〉姿は服を着る人間と変わらない。〈彼らは〉頭にまげを結ばないが、天冠を被って

いるように見える。人間の男女の容姿がそれぞれ相異なるのに対し、〈彼らの〉相貌は唯だ一種類のみである」という。『華嚴経』の中では菩薩の十地をそれぞれ十王に対応させ、八地の菩薩は梵王の姿として世に現れるとする。『大智度論』では梵天の功德を比較して、「須弥山の南に位置する閻浮提の地にいる人々のすべての功德は、西瞿耶尼の地にいる者の一人の功德に及ばない。西瞿耶尼の地にいる者一人の功德に及ばない。東弗喻逮の地にいる者一人の功德に及ばない。東弗喻逮の地にいる者一人の功德は、北鬱單越の地にいる者の一人の功德におよばない。〈このような順に従い、〉欲界の第六天である他化自在天にいる者のすべての功德は、色界の始めである梵天にいる者の一人の功德に及ばないことになる。〈梵衆天にいる者は慈・悲・喜・捨の〉四無量心を修行すれば、大梵天王になることができる」という。

○尸棄^{シキン} 梵語 Śikhin (シキン) の音写である。過去七仏の一つとして仏典にしばしば登場するが、ここでは大梵天王の別名の一つを指す。『法華経』「化城喻品」に、「時衆中有一大梵天王、名曰尸棄」とある。『経律異相』巻一に、「大梵天王、名曰尸棄」とある。「螺髻」は梵王の頭頂に現した螺旋状の文様のこと、澄観『華嚴経疏』巻五に、「尸棄此云持髻、謂此梵王頂有肉髻、似螺形故、亦名螺髻。或云火頂、以火災至此故。貌如童子、身白銀色、衣金色衣」とある。

○『法華文句』云：『法華文句』卷第二下に、「尸棄者、此翻為頂髻。又外國喚火為樹提尸棄、此王本修火光定。破欲界惑」とある。

○『俱舍論』云：『俱舍論』卷八「分別世品第三之一」に、「即於梵輔天處、有高台閣、名大梵天。一主所居、非有別地。如尊處座、四衆圍繞。無色界中、都無有處。以無色法、無有方所。過去未來、無表無色、不住方所」とある。他には、『翻詠名義集』卷二、「仏祖統紀」卷三なども『俱舍論』の文を引用して、梵天の説明に充てる。

○名大梵天Ⅱ底本では「名大梵王」に作る。今、『俱舍論』に依つて改める。

○踰繕那Ⅱ古インドにおける長さの計量する最大の単位。具體的な長さについては、様々な説明が存在し定説がない。梵語 Yojana (ヨージャナ) の音写、ゆじかん、ゆえん、由延はその異訳である。『大唐西域記』に「踰繕那者、自古聖王一日軍行也。旧伝一踰繕那四十里矣、印度国俗乃三十里、聖教所載唯十六里」とある。梵天の身長や寿命について、『大毘婆沙論』卷九八に、「問、大梵天等身量云何。答、大梵王身量一踰繕那半、梵輔天身量一踰繕那、梵衆天身量半踰繕那。問、大梵天等寿命云何。答、大梵王寿命一劫半、梵輔天寿命一劫、梵衆天寿命半劫。应知此処四十中劫合為一劫」とある。

○『阿含經』云：『別訳阿含經』には同じ文がない。『法

華文句記』が引用した『別訳阿含經』の内容の取意。『法華文句記』卷二下に、「別訳阿含第六、広明諸梵来下。第八第十一広明諸天讚仏。諸天若来並同人形。」とある。

○『經律異相』云：『經律異相』卷一「色界二十三天第二」に、「大梵天王、名曰尸棄、與前天同。若修上禪則生此也。於梵衆中發大音声、一切大衆無不知者、梵身諸天各自念言、大梵天王唯與我語、不接余人。我自然得、無所承受、於千世界、最得自在。富有豐饒、能造化万物。我是一切衆生父母、後來諸梵第一尊重。顏如童子、名曰童子。擎雞持鈴、捉赤幡、騎孔雀。初禪名曰梵迦夷、有宮去於他化自在宮由旬一倍」とある。

○『法苑』云：『法苑珠林』卷三「衣量部七」参照。また真諦『仏説立世阿毘曇論』卷第六「云何品第二十」にも同じ文が見える。

○十地對十王Ⅱ『華嚴經』が説く菩薩の十地を十大の山王に對應させること。『六十華嚴』卷三「十地品第二十一之一」に、「菩薩摩訶薩智地有十、過去未來現在諸仏已説今説當説。為是地故、我如是説。何等為十。一曰歡喜、二曰離垢、三曰明、四曰焰、五曰難勝、六曰現前、七曰遠行、八曰不動、九曰善慧、十曰法雲。是十地者、三世諸仏已説今説當説。我不見有諸仏国土、不説是十地者。何以故、此十地是菩薩最上妙道、最上明淨法門」とある。同卷二七「十地品第二十二之五」に、「佛子。是菩薩十地因佛智故。而有差別。如因大地有十大山王。

何等為十、所謂雪山王、香山王、軻梨羅山王、仙聖山王、由乾陀山王、馬耳山王、尼民陀羅山王、斫迦羅山王、宿慧山王、須弥山王」とある。

○梵王乃八地菩薩Ⅱ『六十華嚴』卷二六「十地品第二十二」之四に「菩薩在是地、多作大梵王。典領千国土、功德無有量(中略)若以其願力、過是無有量。今已略解說、第八地妙相」とある。

○『智論』校量梵福云：Ⅱ『大智度論』には同じ文がなく、『法華文句』による引用である。『法華文句』卷十上に「格量中先与世樂、拔果苦。後与涅槃樂、拔生死苦。此是略拳梵福、今更広之。滿閻浮人福、不及西瞿耶尼一人福。滿西瞿人福、不及東弗婆提一人福。滿三天下人福、不及北鬱單越一人福。滿四天下人福、不及一四天王。四天王不及一釈。乃至第六天、不及一梵福。梵福有定散、散者無塔処作塔、塔壞者治之、和合僧衆請転法輪、衆散者還合之、是為四福、与梵天等。故言梵福也」とある。

○閻浮地Ⅱ閻浮提洲のこと。梵語 Jambudvīpa の音写。仏教の世界觀の四大洲の一つであり、世界の中心とされる須弥山の南に位置し、人間の住む世界とされている。『翻訳名義集』では、「勝金」、「南瞻部洲」などの訳も見られる。

○瞿耶尼Ⅱ梵語 Aparagodaniya の音写。四大洲の一つ、須弥山の西に位置する。『翻訳名義集』では、「牛貨」、「西瞿陀尼洲」などの訳も見られる。

○弗喻逮Ⅱ梵語 Puravideha の音写。四大洲の一つ、須弥山の東に位置する。『翻訳名義集』では、「勝」、「東弗于逮洲」などの訳も見られる。

○鬱單越Ⅱ梵語 Udrakū の音写。四大洲の一つ、須弥山の北に位置する。『翻訳名義集』では、「勝処」、「勝生」、「北拘盧洲」などの訳も見られる。

※ ※ ※

『求法伝』云、「仏下切利天時、梵王在仏右邊、手執白拂而下。」仏成道已、以宮殿奉仏、請転法輪。『七仏呪経』、「白佛、若有人王欲護其国。有災疫時、持我此呪。一心禅思、念諸疫鬼、速出其国。」諸経護法之類、其文非一。『婆沙論』云、「馬勝不知四大種當於何処、尽滅無余。問至梵王、王遂執馬勝手、引出衆外云、何不問仏。」『華嚴經』云、「梵王語音清妙、一切梵衆各謂梵王独与己言、遠近同等。」『涅槃』云、「婆數仙与梵王論義、於其面門作三目示之。」『劫章頌』云、「独住時經一増減、後念民輔有情生。」即成劫之初梵王先生、梵輔梵衆後生。故彼計為我能生也。『維摩経』、「梵王曰、我見釈迦牟尼仏土、如自在天宮、似宝莊嚴仏土。」

『求法伝』に、「仏は三十三天より俗世間に降誕する時、梵王は仏の右側に伴い、手に白払を持ってともに下生した」という。仏が成道したあとに、梵王は自らの宮殿を献上し、そ

ここで仏法を広めるように仏に懇願した。『七仏呪経』に、「梵王は」仏に申し上げる。若し俗世間の王者がその国を守るため、災難や疫病が発生した時に、私「梵王」が説いたこの呪文を加持し、心を清めて禪定に入れば、もろもろの疫病鬼は、たちまちその国から退散することになる」という。ほかにも梵王護法の事例はさまざまな經典に書かれている。『婆沙論』に、「馬勝尊者は、世界を形成する地・水・火・風という四つの要素がどうすれば滅びるかについて知りたい。梵王に訊きに行った時、梵王は馬勝尊者の手を執り、大衆のいない所に連れ出し、仏に尋ねるように勧めた」という。『華嚴経』に、「梵王は美声を持ち、その声ははつきりとして、すべての梵天界の民衆はたとえ遠く離れても、梵王の話は自分だけに語っているかのように聞こえる」という。『涅槃経』に、「婆藪仙人は、梵王と仏理を論じた時、悟らせるために」梵王の顔面に三番目の眼をつけた」という。『劫章頌』に、「梵王は」一劫の間に自分一人のみ天界にいる。その後、天界に民衆を入れようと思い、梵衆を作った」という。これによつて、一劫を終えた後、梵王は先に天界に現れ、梵輔天及び梵衆天の民衆は続いて現れた。このため、梵衆は梵王のことを「自分たちの」現れのきつかけとしていた。『維摩経』に、「梵王はいう、私は釈迦牟尼の居場所を自在天宮また宝莊嚴仏土のように見ている」という。

○『求法伝』云：「宗暁の『金光明経照解』では義浄の『求法高僧伝』としているが、『求法高僧伝』にはこの文はない。『義楚六帖』卷十三「梵王」部の「侍仏執扨」条に、「求法伝云、仏下切利天時、梵王在右辺、手執白扨而下」とある。行霆は『義楚六帖』のこの例文を依用したと見られる。また『法顕伝』に「仏從切利天上來向下、下時化作三道宝階。仏在中道七宝階上行。梵天王亦化作白銀階。在右辺執白扨而侍」とある。ここの『求法伝』は『法顕伝』のことを指すのが妥当である。○仏成道已：「法華経」「方便品」に、「我始坐道場、觀樹亦經行。於三七日中、思惟如是事。我所得智慧、微妙最第一。衆生諸根鈍、著樂癡所盲。如斯之等類、云何而可度。爾時諸梵王、及諸天帝釈、護世四天王、及大自在天。并余諸天衆、眷屬百千万、恭敬合掌礼、請我轉法輪」とある。同「化城喻品」に、「爾時五百万億諸梵天王(中略)請仏轉法輪。時諸梵天王、頭面礼仏繞百千匝。即以天華而散仏上、所散之花如須弥山。并以供養仏菩提樹。花供養已、各以宮殿奉上彼仏。而作是言、唯見哀愍饒益我等、所献宮殿願垂納受」とある。『義楚六帖』卷十三「梵王」部の「請転法輪」、「願献宮殿」条を参照。○『七仏呪経』：「七仏所説神呪経」卷第二に、「我大梵天王欲説大陀羅尼以護衆生(中略)若諸国土疫病劫起、其王爾時应当精進、七日七夜受持八戒、应当淨心六時行道、為万民故、調伏其心、救其境内一切人民、以慈悲心勸令行善。其

王爾時於宮殿内、然百千灯以救民命。請召十方諸大菩薩梵
釈四天王、三自帰依叩頭求哀。十方諸仏大菩薩衆釈梵四
王諸来大士救我民命。如是三説、如是説已。当誦此陀羅尼

三七二十一遍。誦此陀羅尼已、王與群臣夫人嫫女、默然而坐、
禪思一心。我大梵天王、爾時当与梵衆釈衆四大大王諸大龍王
八部鬼神、飲其毒氣、悉得消除。王於爾時於禪思中、得見我
身大梵天王釈提桓因四大大王。以見我故、倍復精進。以精進
故、其国土境旧住鬼神惱人民者、我又当遣四大大王驅令出界。

以我大梵天王慈悲力故、其国土境悉得安穩」とある。行寔は
『義楚六帖』卷十三「梵王」部の「説呪護国」条を依用した。

○『婆沙論』云：「原文は『大毘婆沙論』卷一二九「大種
蘊第五中大造納息第一之三」を参照。行寔は『義楚六帖』卷
十三「梵王」部の「詔誑馬勝」条を依用した。

○『華嚴經』云：「六十華嚴」卷三四「宝王如来性起品第
三十二之二」に、「譬如大梵天王、於梵衆中、出梵音声。一
切大衆、無不聞者、彼梵音声、不出衆外。時梵身諸天各作是
念、大梵天王唯与我語、不对余天」とある。行寔は『義楚六
帖』卷十三「梵王」部の「言音清妙」条を依用した。

○『涅槃』云：「南本『涅槃經』卷三五「橋陳如品第二十五
之二」に、「大王、不聞婆數仙人為自在天作三眼耶」とあり、
大自在天、いわゆる摩醯首羅のために三番目の眼をつけたと
いう。『義楚六帖』卷十三「梵王」部の「梵王三目」条では、「自

在天」のことを「梵天」と言い替えたため、行寔もそのまま
依用したと見られる。

○『劫章頌』云：「慈恩基の『瑜伽論劫章頌』に「過此空時
成劫興、大梵天王最初建。独住時経一増減、從念臣人輔衆生」
とある。行寔は『義楚六帖』卷十三「梵王」部の「劫初独住」
条を依用した。

○『維摩經』：「維摩經」(仏国品第一)を参照。行寔は『義
楚六帖』卷十三「梵王」部の「所見不同」条を依用した。

※ ※ ※

今之仏会、所以列之居首者、其意有五。一是三界号令之
主、二是從仏下生之者、三是請転法輪之者、四乃諸経弘護推
先、五以「百録」標請在初。『舊傳』引「撃鷄」、「持鈴」。『六
帖』録「問眼」、「鑿眸」、既非顯要、今不附録。余文例此。
然「探玄記」引「俱舍論」得梵福有七種、一未造支提於中
而作、二立僧伽藍、三僧已散能和、四修四無量、五代父母仏
命、六自出家教人出家、七建立法幢。若人於上七業中随作一業、
得生梵天。」是知生其初禪梵天、由此七業而受梵福、況其王乎。
故樂福者得不勉力而修。又其梵福之量、『俱舍』又云、「用諸
衆生共業、感一三千大千世界業、為一梵福之量。」則又勝「智
論」校量六天之量。且一梵天福量之尚爾、況梵王乎。是宜興
供以崇仏会矣。

今の〈通常の〉仏会道場において、梵王を諸天の首班に置く理由は次の五つである。一つ目は、〈梵王が欲界、色界、無色界の三界を指揮できるからである。二つ目は、〈梵王は〉仏に伴い下生したからである。三つ目は、仏に説法するように懇願したからである。四つ目は、諸々の經典で仏を弘護する最適な者と称えられたからである。五つ目は、『国清百録』では仏会に奉請すべき最初の天神とされたからである。〈神煥の〉旧『諸天伝』では、『擎鷄』、『持鈴』の典拠をも引き、『義楚空六帖』は、『問眼』、『繫眸』の事例も記したが、特に記すべき内容ではないため、ここでは附録しない。以下の諸天の伝記もこの例に従う。

このほか、『華嚴經探玄記』では『俱舍論』の「梵天界の福德を獲得するには七種の方法が有る。一つには、仏塔や霊廟を建てること。二つには、僧侶の修行道場を建てること。三つには、僧侶を和合させること。四つには、〈慈・悲・喜・捨の〉四無量心の修行を実践すること。五つには、父・母・仏のために命を惜しまないこと。六つには、自ら出家してさらに人を出家させること。七つには、仏の教えを宣説すること。もし人々が、この七つの方法のいずれか一つをやり遂げれば、梵天界に転生することができる」の一文を引用した。これによれば、初禪天に転生した梵衆でさえ、この七つの方法によって、梵天界の福德を受けることができる。梵天王へが

この梵福を受けていること」は言うまでもない。この福德を受けることを望む者は、当然ながら一生懸命これらの方法を実践しようとするからである。さらにこの福德の様相について、『俱舍論』では、「共通する果報を得ようとするすべての衆生の所作を用いて、所在の大千世界の果報を感じとることは、一つの梵天界の福德の様に相当する」という。〈この説明は〉『大智度論』に説く諸天界の福德の比較よりも明晰である。一の梵衆の福德すらこのように大きいものであるのであれば、梵王の福德はなおさら〈大きいはず〉である。ゆえに大梵天王は供養され、仏会に奉られるからである。

○『百録』標請Ⅱ『国清百録』が収録した「金光明懺法」では、大梵天を諸天の首班として奉請する。『国清百録』卷一「金光明懺法第五」に、「一心奉請大梵尊天、三十三天、護世四王、金剛密迹、散脂、大弁、功德、訶利帝南、鬼子母等五百徒党。一切皆是大菩薩。亦請此処地分鬼神」とある。

○『擎鷄』、『持鈴』Ⅱ神煥の『諸天伝』が録した大梵天の二つの特徴である。『経律異相』卷一「色界二十三天第二」に、「大梵天王（中略）顔如童子、名曰童子。擎雞持鈴、捉赤幡、騎孔雀」とある。

○『六帖』録「問眼」、『繫眸』Ⅱ『義楚空六帖』卷十三「梵王」部が録した「問眼幾何」（『維摩経』による）及び「提婆繫眸」（鳩摩羅什『提婆菩薩伝』による）の二つの記事である。

○『探玄記』引『俱舍論』…『華嚴經探玄記』卷八を参照。ただし、「七種の梵福」は、『俱舍論』や『毘婆沙論』などに記されておらず、該当する諸論及び天台系の『法華文句』などはいずれも「四種の梵福」(仏塔を作る、仏寺を作る、僧を和合する、四無量心を修するの四つ)に作る。また唐・普光の『俱舍論記』では真諦三蔵の説を引き、四梵福を元に、さらに六種を加え、「十種の梵福」を説いていた。この説は『探玄記』の「七種の梵福」説に極めて近いと思われる。『俱舍論記』卷一八「分別業品第四之六」に、「真諦師解云、十勝行者謂前四梵福上更加六種、一為救母命捨自身命、二為救父命捨自身命、三為救如來命捨自身命、四於正法中出家、五教他出家、六未轉法輪能請轉法輪」とある。

○『俱舍』又云…『俱舍論』には同じ文がない。『華嚴經探玄記』卷八の関連箇所引用である。『俱舍論』卷一八「分別業品第四之六」に、「感劫生天等、為一梵福量。論曰、先軌範師作如是説、随福能感一劫生天、受諸快樂是一福量。由彼所感、受快樂時、同梵輔天一劫寿故」とある。また梵福の量の多少に関する記述について、必ずしもこれが具体的な量を確定していたのではなく、梵福の広大無辺さを称賛する意味を込めて記されたものである。『大毘婆沙論』卷第八十二に、「一梵福量皆是贊美此梵福言、未為称実而実梵福無量無辺、是広大思所引發故」とある。

○衆生共業…底本では「衆生惡業」に作る。今、『華嚴經探玄記』卷八に出る同文の箇所によりて改める。

讚曰、

※ ※ ※

我仏天上下生時、大梵天王前引之。
手執白扠或居右、宮殿奉獻吉祥師。
請轉法輪真世主、大千万億統辺夷。
十八梵中遵号令、故応上下総依帰。
身量修長六千里、一劫半寿数希奇。
色若白銀頂有髻、別名尸棄破邪思。
欲界六天難並福、禁戒明淨具威儀。
護法護国護修行、別召衆典每高推。
雖則計為衆生父、天宮仏土動相隨。
欲生其中七種福、造立仏寺建支提。
和合衆生代父命、法幢高樹度群機。
自他出家超欲海、喜捨無量広慈悲。
聞茲聖力難思議、首当崇奉仰靈儀。

讚歎していわく、

我が仏、天上より下生する時
大梵天王、前まきに之れを引く
手から白扠を執りて或は右に居り

宮殿をもつて、吉祥師に奉獻す

法輪を転ずることを請う真の世主

大千の万億、辺夷を統う

十八梵の中、号令に遵い

故に応に上下にして総べて依歸すべし

身量修長すること、六千里なり

一劫半の寿、数えるに希奇なり

色は白銀の若く、頂に髻有り

別名は尸棄にして邪思を破る

欲界の六天、福を並べ難し

禁戒明淨にして威儀を具える

法を護し国を護し修行を護す

別召して衆典も毎に高く推る

則ち計して衆生の父と為すと雖も

天宮も仏土も動もすれば相い隨う

其の中に生せんと欲するに七種の福あり

仏寺を造立し、支提を建つ

衆生を和合し、父の命に代わり

法幢高く樹てて群機を度す

自他出家して欲海を超え

喜・捨を無量にして、慈・悲を広くす

茲れを聞いて聖力思議し難し

首めて当に崇奉して靈儀を仰ぐべし

○身量修長六千里〓六千里は、六十里に作るべきである。

『大唐西域記』の「旧伝一踰繕那四十里矣」の記載によれば、

身長一踰繕那半の梵天は六十里に相当する。

〔記〕

大梵天王の功績

行靈は、『義楚六帖』に基づき、さまざまな仏典における大梵天の有名な物語をほぼ網羅した。さらに、その業績を、

①三界を統率する首領である、②釈尊のすぐ後に俗世間に生まれる、③釈尊に最初の法輪を懇願する、④諸仏また諸経

を護衛する首領である、⑤『国清百録』の「金光明懺法」での奉請順序が最初である、とする五つの面にまとめた。この

行靈説を、南宋の天台僧宗曉（一一五一―一二一四）は『金

光明経照解』の中で、「大梵天」の紹介に際し依用した。

そのなかで、大梵天王が釈尊に初めての説法を要請した件

は、仏教の教学発展史においても最も重要な出来事に位置づ

けられるべきものである。

『法華経』「方便品」では、釈尊が菩提樹の下で成道した後、

自ら領解した微妙第一の仏智を衆生に如何にして伝えようか

と躊躇した時に、諸々梵天王は諸天を率いて、釈尊に是非衆

生のために説法するように要請したとされる。そこで釈尊は

初めて、三乘方便一乘真実の教えを説いたという。

『法華経』は、この場面について、複数の梵天王が諸天とともに釈尊に要請したとするが、『増一阿含経』卷十の「勸請品」は、釈尊の「初転法輪」は、大梵天王の要請であると明確に記している。この話の大筋は、つぎの通りである。

釈尊は、成道したばかりの時、自分が悟った不可思議甚深の教えを一般の人々に説いても、だれも信用せず、実践もしないに違いないから、衆生への教化は無駄であるとして、説法を断念しようと躊躇した。その時、梵天界にいる大梵天王はこの釈尊の悩みを察知し、釈尊の前に現れた。そして、衆生の根機は泥の中の蓮華の種子のようなものであり、仏法を聞かせることによつて、その根機が誘発され、泥水の中から芽を出し美しい蓮花が咲くように仏道を悟らせるものであると、「初転法輪」を強く勸請した。この梵王の懇願があつたため、釈尊は衆生への説法を決意したのである。

『増一阿含経』のこの内容の類似するものとして、他に『瑞応経』卷下、『過去現在因果経』卷三(両者はともに、大梵天王が成道した後になぐ涅槃しようとする釈尊を止め、世に止住させ衆生に説法を懇願した話である)などがある。これらはいわゆる「梵天勸請」という話の由来ともなり、また大梵天王の最大の功績であるとも言われている。

仏教の世界観

北京の雍和宮の大殿の前の中庭に、香炉や蠟燭たてのほか、一般の仏寺ではなかなか目にするものもないものも置かれていた。それは、大きな青銅製の須弥山の模型である。この模型は、真諦の『立世阿毘曇論』卷二の「数量品」の説や『俱舍論』卷八の「分別世品第三」の説に基づくものか、また『仏祖統紀』卷三一「世界名体志」の諸説や世界図を参照して作られたものであると見られる。仏教から見た一つの世界における、地獄から須弥山頂の忉利天までの部分について、立体的で精巧に作られていた。

行霊が語つた大梵天王の居場所である梵天界は、須弥山頂のさらに上にあるため、雍和宮の模型には見られない。そこには、南閻浮洲にいる凡夫の肉眼では到底その姿を見ることができないという意味が込められているとも考えられる。

仏教の一世界は、須弥山を中心に成立した。須弥山は、須弥海という内海や七つの山(七重の柵や壁のようなもの)に囲まれていた。七つの山の外にある外海の四方には四つの島があり、南に位置する閻浮提洲は人間が住む所である。北の島(北拘盧洲)を除き、それぞれの島の地下には地獄がある。唐・李師政の『法門名義集』の説によれば、須弥山の中間には四天王天(欲界六天の最初)、山頂には忉利天(欲界六天の第二)がある。山頂より上には順次、欲界に属する夜摩天、

兜率陀天、化樂天、他化自在天の四つの天界、色界に属する梵衆天、梵（輔）天、大梵天（初禪天の三つの天界）、少光天、無量光天、光音天（二禪天の三つの天界）、少淨天、無量淨天、遍淨天（三禪天の三つの天界）、福生天、福受天、広果天、無極天、無煩惱天、無熱天、善見天、善現天、色究竟天（四禪天の九つの天界）の十八の天界、無色界に属する空無辺処、識無辺処、無所有処、非想非非想処の四つの天界がある。このような構成によって仏教の一つの小世界が完成されている。千個に及ぶ小世界は「小千世界」と呼ばれ、『華嚴經』が説く梵王の勢力範囲である。また千個の「小千世界」を集めれば、一つの「中千世界」になり、さらに千個の「中千世界」を集めれば、一つの「大千世界」になるのである。『法華經』では、梵王は一つの大千世界を統治したとする。「大梵天王伝」の中には「三千大千世界」という語も見えるが、これは「大千世界」と全く同じ意味をもつものであり、別名に過ぎない。また、「大千世界」の教化は、一人の仏によって行われるため、「仏国土」という別名もある。

梵福を求めない南閻浮の人々

「大梵天王伝」では、小世界にいる者の「幸せ比べ」をしていた。この内容を読むと、南閻浮洲に生まれた我々は、いくら修行しても、梵天の境地に体得するどころか、となりの

西瞿耶尼洲の人に追い着くこともほぼ不可能であり、ましてや仏になることは夢のまた夢であろう、と感じるようになることがある。要するに、娑婆世界の南閻浮提洲の何十億の人々が善行を一生懸命作し、それにより得られた幸せのすべては、となりの西瞿耶尼洲にいる一人の青二才の功徳にすら及ばないという内容である。同様に、西洲の人々のすべての功徳は、東洲の一人の功徳に及ばないとする。このように順々に比べるうちに、天界の大梵天王が手にした幸せは比類なきものになり、南閻浮洲の一人の凡夫が修行して得られた功徳の大きさと比較すると、まるで地球と蟻との大きさの違いになるという。

南閻浮洲の人々が善行を行い、得た功徳はごくわずかではあるが、『大智度論』卷六五「釈無作実相品第四十三之余」では、「閻浮提の人々は仏道修行において、婬欲を断ち切ることができる、正しく止観を行うことができる、ひたすら精進することができるといふ三つの点で、諸天より良い素質を具えている」と説明する。また、『翻訳名義集』卷二「世界篇」も、「仏に値い、その教えを聞くためには、南洲は最上の場所である」、「仏は南洲にしか下生しない」などとし、他の三洲には楽しみがたくさんあるため、南洲ほど仏に親近することはできず、苦しい環境であるからこそ、南閻浮洲の人々は一層仏道に励むことができるという。

道元は十二巻本『正法眼蔵』の「発菩提心」巻に、「この発菩提心、おほくは南閻浮の人身に発心すべきなり。(中略)菩提心をおこしてのち、三阿僧祇劫、一百大劫修行す。あるいは無量劫おこなひて、ほとけになる」と記した。南閻浮洲の人々は、梵福ばかりを追い求めるのではなく、三阿僧祇劫(菩薩が仏果を得るに至るまでの久遠の期間)更には一百大劫(菩薩が仏果を得た後、三十二相を感得する業を修行する期間)を経て仏になることを目標とすることも可能であるという。

大梵天王の身長

「大梵天王伝」の文末に付された梵天を賛美する詩偈を読むと、違和感を覚える箇所がある。それは、梵天の身長について、原文ではその身長を「一踰繕那半」とするところ、詩偈では「六千里なり」と言い替える点である。『大唐西域記』などの資料を照らし合わせると、古い資料では一踰繕那を四十里とする。玄奘は十六里としている。したがって、六千里ではあまりにも大きすぎるのではないであろうか。そこで校訂をして「六十里」と直すべきか迷ったものの、中国には「白髮 三千丈」や「飛流 直下 三千尺」(ともに唐の詩人李白の作品)という漢詩の例があることから、老大家であった行霆は梵天の素晴らしさを賛美するためにあえて誇張して

「六千里」としたとも考えられることから、直すことをしなかった。

そもそも仏典に表れる「一踰繕那半」という度量について、仏教思想を勉強する者には、その正確な意義や数値を検討する必要はそれほどないと考えられている。「踰繕那」を例にすると、『翻訳名義集』では、「帝王が一日に軍を率いて行進した距離」、「大きな牛の鳴き声が最も遠く聞こえた距離の八倍」、「十六里」、「三十里」、「四十里」、「六十里」、「八十里」などの諸説が見られる。

しかし、具体的な数値に拘らず、思想的な視点から見ると、仏教が説く独自の合理性が秘められているように考えられる。

『大毘婆沙論』巻九八によれば、梵天王の身長は「一踰繕那半」であり、その寿命は「一劫半」である。梵輔の身長は「一踰繕那」であり、その寿命は「一劫」である。梵衆の身長は「半踰繕那」であり、その寿命は「半劫」である。すなわち、身長と寿命の数値は等しいのであって、梵界の諸天は、空間や時間におけるある種の平衡性を保っているとも読み取ることができる。

『首楞嚴経』巻四では、「世界」の定義について、上下を含む十方を「界」とし、過去・現在・未来の三世を「世」とする。空間と時間の平衡性や合理性を「世界」の成立の基準と

した。天台教学によく見られる「横」、「豎」による分析法も、まさに空間と時間の両軸を指している。この世界に存在する物事、道理も、このように空間と時間によってそれぞれの合理性が保たれているのである。

〔補記〕

訳注記(一)の行霆の序文(三四四頁、駒大仏教学部論集三八号)が引用した智円の「後之病今、亦猶今之病昔」(『孟蘭盆經疏披華鈔序』、『閑居編』卷五)の一句は、もともと『呂氏春秋』卷一一、「長見篇」の「今之於古也、猶古之於後世也。今之於後世、亦猶今之於古也。故審知今則可知古、知古則可知後、古今前後一也」の一文によるとも見られる。

(つづく)